

性犯罪・性暴力対強化のための関係府省会議
こどもの性的搾取等に係る対策に関する関係府省連絡会議
2023年7月4日

男児/男性の性暴力被害 —可視化から支援体制の拡充へ向けて—

立命館大学大学院人間科学研究科博士後期
臨床心理士・公認心理師
宮崎浩一

研究動向

60年代：

「刑務所内」など特殊な環境での性暴力として調査

80年代～：

一般男性を対象にした被害率や影響等の調査

90年代～：

紛争下の性暴力における男性被害者の実態調査報告

2010年代～：

ジェンダー・セクシュアリティの観点から理論化が進む

実態調査



可視化



理論化
支援の拡充

男性／男児の性暴力被害の可視化

実態調査

80年代～：男児の性虐待

90年代～：若年者の調査に男性が含まれる

可視化

2017年：強制性交等罪

2023年：不同意性交等罪

- 社会的に男性や男児が性暴力の被害に遭うことは認識されてきている。
- 支援体制の拡充を考えられるようになってきた。

理論化
支援の拡充

ジェンダーとセクシュアリティ

■ ジェンダーやセクシュアリティが要因の一つであることは定説

- 被害当事者の回復プロセスに影響する。（たとえば、被害開示の長期化、性的アイデンティティの混乱など）
- 加害者が利用することもある。
- 第三者である周囲の大人や、時には支援者なども気づくことが難しくなる。

■ 「身体の統合性と性的自己決定を侵害するもの」（国連）

- 理念的には「人」に対する性を用いた暴力として捉える。
- 被害後の心理的反応は共通していることが多い。
- 性にに基づく差別がある社会においては、属性固有の課題が存在する。

女性の被害と男性の被害

男性優位・家父長制社会

女性差別がある社会で、
女性が受ける性暴力

男性優位な社会で、
男性が受ける性暴力

エンパワメント・
性差別の解消

男性特権の自覚
男らしさの解体

→被害者支援の潜在的違い

被害形態

■ 加害者の行為が様々

- 性的なからかい、盗撮、痴漢、裸をみせられること、マスターベーションの強要、セックスの強要など、様々な形態がある。
- オンライン上での被害。
- 貧困、家族関係、性指向、性自認、障がい、出自、国籍など様々な社会的脆弱性が利用されることがある。

■ 身体反応を利用する加害行為

- 勃起や射精といった反応を加害者が利用する。
- 「させられる被害」の理解しづらさ、そして重篤な影響。

加害者の性別

■ 女性加害者

- 男性 = 能動、女性 = 受動の関係に見せかける。
- 女性 = 被害の構図にとどまることで、責任を被害者男性に押しつける。

■ 男性加害者

- 被害者のことを「女性化」し劣位の性とする。
- 加害者男性は「女性化された被害者」よりも「男らしい」。
- 被害者の方が同性愛嫌悪にさらされる。

「快」を強制する暴力

■ 身体は刺激に対して反応する

- 意志とは無関係に、また、恐怖や不同意でも身体的な「快」は生じる。
- 自分の身体がモノとして、加害者に渡された感覚。
- 低年齢（特に、第二次性徴前）の被害体験は「性的」と理解できず、その意味を後になって分かることも。

■ ペニスの反射的な反応は、加害者にも第三者にも目に見える

- 被害者の身体反応を介して深く傷つけ、責任を被害者の方へ押しつけようとする。
- 第三者にとって、被害者男性に積極的な関与があったとみえてしまう。

影響

■ 心身の重篤な影響

- 鬱、罪責感・自己非難、怒り、不安、依存、対人関係の困難、PTSD、など。
- 脳、体へのダメージ。

■ 性的問題

- 性機能の障害、衝動的な性行動、リスクの高い性行動、本人が好ましく思っていない性的ファンタジー。
- 性的アイデンティティの混乱。

■ 性的暴力は「人」に重篤な影響を及ぼす

- PTSDの発症には男女で差がないというメタ分析*¹もある。
- 男女とも健康リスクを高めたり、物質依存、他者との関係に影響など、さまざまな問題をもたらす。

*1 : Tolin, D. F., & Foa, E. B. (2006). Sex differences in trauma and posttraumatic stress disorder: A quantitative review of 25 years of research. *Psychological Bulletin*, 132(6), 959–992.

性的アイデンティティや性指向の混乱

■ 当該文化における規範的男性像と一致していないことや、被害者自身が抱く性的アイデンティティの違和感

- 自分の「男らしさ」への疑問。
- 性自認、性指向が変わってしまったのかという不安。

■ 性規範の効果

- 被害者の性的ありようが注目されるのは、社会的な規範の逸脱とみなされるため。
- 自身のマイノリティ性が明らかになるのをためらって打ち明けられないことも。

被害後の困難

■ 被害認識や被害開示の長期化

- 長期化する背景には、ジェンダーやセクシュアリティ規範の影響。
- 「男らしさ」の期待、（たとえば、相談するのは「女々しい」）。
- 「男性が性被害と言っているのか？」といった言語化や意識化の困難。

■ 相談する際の困難

- 実際の相談先がわからない。
- 男性が相談してもいいのか確信を持ってない。
- 男性の被害を信じてもらえるのか不安。
- 相談した相手からさらに加害行為がある場合も。→複数の相談先が必要
- ①社会政治的障壁（男性性,資源の乏しさ） ②個人的障壁（経験の名付け,性指向など） ③ 対人的障壁（過去の反応,不信など） *1

* 1 : Easton, S. D., Saltzman, L. Y., & Willis, D. G. (2014). "Would You Tell Under Circumstances Like That?": Barriers to Disclosure of Child Sexual Abuse for Men. PSYCHOLOGY OF MEN AND MASCULINITY, 4, 460.

支援等の課題

■ 発見の課題

- 相談される前に大人が異変に気づけるかどうかは重要。
- 発達段階に合わせた性の知識、ジェンダーセクシュアリティの知識。
- 「男の子だから」で矮小化しない。このように思うときには偏見が存在。

■ 聞くことの課題

- 男性被害者自身が性的被害として語れないこともある
- 聞く側の大人がどのように理解したら良いのかわからなくなる。その不安から聞けなくなることも。

■ 大人の課題

- 産前から子どもに関わる大人は多い。子どもに関わる専門職（医師、助産師、保健師、保育士、教職員など）
- 大人が矮小化していくことで被害が潜在化することがある。
- 早期に被害を発見するためには、大人が気づけるための知識、スキルを身につける必要。

男性被害者の話を聞く難しさ

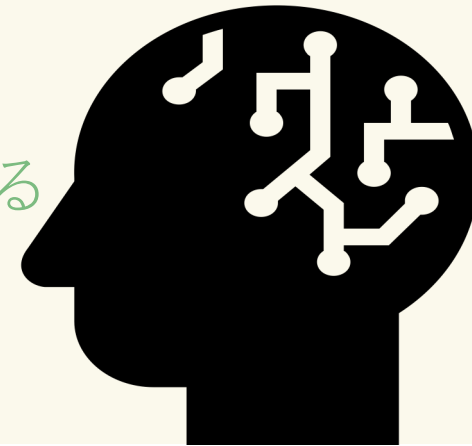
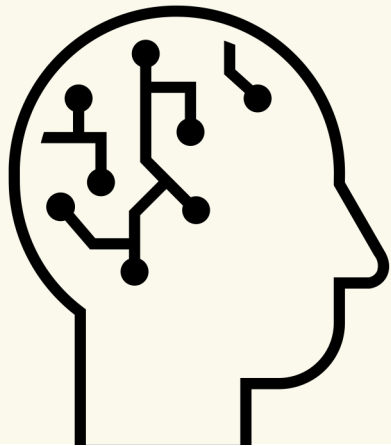
整理して話すことができない

どう理解すればいいのか混乱する

- 性の描写は、聞く人の情動をととても揺さぶる。●

攻撃的な話し方をする人（男らしさを表現？）
体験を詳細に話す人（混乱？）

→ 典型的な男性像に当てはめて理解したくなる



今後の取り組みとして

■ 調査

- 国内の調査研究は限られており、全体的な被害実態を把握できていない。
- 性的マイノリティなど社会的に弱い立場になる人を含めた調査。

■ 研修

- ジェンダー中立な性犯罪に関する刑法の理念に一致して考えられる研修。
- 何らかの属性を付記しなければならない潜在的被害者に気付けるための研修。
- 直接子どもに関わる人への研修。

■ 支援機関・制度

- 支援現場で培われている知識や経験が継承されるようにする。
- それら知識や経験が共有される仕組み。
- 他機関連携。

■ 予算

- 現状は個人の努力で対応されていることが多い。一定の水準の知識やスキル向上を可能にする賃金、予算、身分の保障。